第56号

平成３０年

１０月１日

題 字
植 木　満
初代東進会会長

東進

発行所

土浦一高東進会

茨城県立土浦一高
進修同窓会東京支部

発行人
東進会会長 飯塚　哲哉

事務局　〒102-0093　東京都千代田区平河町２－７－４　砂防会館別館６階
宮崎法律事務所　気付　東進会事務局
TEL（FAX）　０３－５４２１－５３２１
E－mail：toshinkaisecretary@gmail.com
ホームページ　https://to-shin-kai.jimdo.com/

傘寿を迎えられた昭和３１年卒の皆様

■平成３０年度総会・懇親会
演　奏　　土浦一高管弦楽部
演　舞　　土浦一高応援指導部
講　演　　一ノ瀬　正樹（昭和５１年卒）
落　語　　立川志のぽん　こと
廣瀬　敦（平成７年卒）

■総会講演録
「福島問題と将来への教訓
－哲学の視点から－」
一ノ瀬　正樹（昭和５１年卒）

■「落語との出会い」
立川志のぽん　こと
廣瀬　敦（平成７年卒）

■総会・懇親会出席者

■アカンサスクラブ講演録
「気候変動と私達の未来」
伊ヶ崎　大理（平成５年卒）

■リレー放談（第６回）
「故郷の山と歳時記を手に」
柳　一榮(昭和５８年卒)

福島問題と将来への教訓
～哲学の視点から～
一ノ瀬　正樹（昭和51年卒）

福島問題は、あの3・11から七年以上が経ったいまでも、複雑な様相を帯びて私たちの前に立ちはだかっている。すでに起こってしまった被害、そして現在進行中の被害、そして人々の心が引き起こすバイアスや差別など、とても一つの学問だけで解明できない多様な問題系がここに現出している。たしかに、亡くなられた方々を取り返すことはできない。けれども、津波震災そして原発事故、それらは世界中のどこでも、いつでも、起こりうる。だとしたら、たとえ後付け的な考察になろうとも、この複雑多様な問題に全方位的な角度から立ち向かい、津波震災や原発事故の教訓を学び、それを将来世代へと伝えていくことは私たち世代の責務であろう。私は、この福島問題に対して、哲学の視点から問いを提起し、問題の実相に少しでも迫り、教訓を汲み取っていきたい。

最初に、災害や事故が発生した際の第一に優先すべきこと、すなわちプライオリティは、**「いのちの保全」**であること、この点を確認しておきたい。この自明な点を確認するだけで、重要な論点が導ける。すなわち、「いのちの保全」を十分に果たせずに、死者数を増やしてしまった状況は最善ではなかった、したがって、将来の教訓を導くには、果たしてそのような死者数の増大は避けることはできなかったのだろうか、という問いを提起しなければならないのである。私は、哲学研究者として因果論を主題的に論じてきたという経緯もあり、この問いに向かうに当たり、死者数の増大を引き起こした**「原因」**は何だったのか、という切り口から検討を進めていきたい。

まずは、福島問題について、その前提となる事実を押さえておこう。そもそも福島県の被災者が被った「被害」とは何だったのだろうか。福島の被災者の方々の「被害」は自明である。津波震災で亡くなった１６００人以上の方々や負傷された方々、そして原発事故に巻き込まれた方々、それらを振り返れば、その「被害」が何であるかは明らかではないか。そのように言われるかもしれない。たしかに津波震災の「被害」は明らかである。けれども、原発事故に巻き込まれた「被害」とは果たして何なのだろうか。いわゆる震災関連死などのことだろうか。実際、福島県の震災関連死は、直接死をすでに上回り、２０１８年には２２００人以上となってしまっている。ここで注意すべきは、福島県に関して、津波震災による直接的死は、岩手と宮城という他の被災二県に比べて相対的に少なかったのに、震災関連死は、岩手・宮城に比して突出して多いという点である。では、こうした震災関連死というのは、そもそも、どのような「被害」なのだろうか。この辺りから、混乱が始まる。福島第一原発事故によって放射性物質が一定量拡散されてしまった。この点が、他の被災二県と異なる条件である。ならば、原発事故による「被害」とは、放射線被曝による放射線障害なのだろうか。それによって２２００人以上の方々が亡くなってしまったのだろうか。けれども、よくよく冷静に考えてみれば、放射線障害によって２２００人以上の人々が亡くなってしまったというのは成立しえない理解であることが分かる。福島原発事故は、放射性物質飛散の規模という点で、チェルノブイリ原発事故のおよそ7分の1程度であり、実際に福島県に住み続けている90％以上の方の被曝した実効線量は年間１mSv以下である。多くの研究者の方々の綿密な調査によって、福島県の人々の放射線被曝線量は、不幸中の幸い、内部被曝・外部被曝ともに、急性放射線障害はもちろん晩発性の健康被害を発症させるほどの量にも至らなかったことがほぼ判明している。すなわち、福島原発事故は、放射線被曝という点では、健康影響はほとんど心配のないものであった。１９９９年のＪＣＯ臨界事故とはおよそカテゴリーの異なる事故だったのである。

では、なにゆえ２２００人以上の方々が亡くなってしまったのか。その**「原因」**は何なのか。それは果たして不可避だったのか。一旦あのような事態になると、ベルトコンベアに乗ったがごとく、必然的に発生してしまう被害なのか。ここに哲学の因果論の視点が要請されてくる。一つの標準的なやり方は、いわゆる「but for テスト」であろう。反事実的な仮定をして構成される条件文の説得性によって、原因指定の適切性を測るという手法である。私は、このテストをパスしうる原因候補を三つあげたい。1)津波震災、2)原発事故、3)避難行動の弊害、の三つである。いずれの事項に対しても、「もしそれがなかったならば、これほどの震災関連死は発生しなかっただろう」と言えると思われるからである。1)と2)については明らかだろうが、3)についても、体育館などの避難所で長期に避難生活を送ることや、震災以前のコミュニティから引き離されて簡易的な仮設住宅に引きこもることなどが、とくに高齢者にとって「いのち」を脅かすことにつながることは、少し想像すれば理解できるはずである。実際、自立歩行のできない高齢者を無理に避難させて移動・避難中に亡くなる方を増やしてしまった「双葉病院の悲劇」といった痛恨の事例や、将来を悲観してメンタルな不調を被り自死に至ってしまった例、運動不足による糖尿病や高脂血症悪化による死亡例などが少なからずあったのである。

そして私は、この三つの候補に対して、どれが最も容易に、そして最も後の時点になっても予防可能であったかという視点、すなわち、法理学で言うところの「近因」の概念に似た視点を適用したい。そして、比較的に実行可能性が高かったという点、および後の時点でも予防可能性が高かったという点で、私は、避難行動の弊害を予防しなかったことに震災関連死多発の**「原因」**を求めたいと考える。実際、線量を適切に評価し屋内退避をして様子を見る、暫時屋内退避をして避難経路を確保する、あるいは仮設住宅のクオリティを上げる、といった避難行動の弊害を予防する方策は、津波震災や原発

事故が起こった後でさえ、一定程度は実行可能だったはずだし、実際の線量に鑑みて、そうした方策は「いのち」を守ることに一定程度貢献したはずである。少なくとも、そうした避難行動の弊害の予防は、津波震災そのものの直接的被害を予防することや、原発事故そのものを予防することに比して、比較的容易に実行できたと思われるし、後者二つの予防策よりもずっと後の時点になっても実行可能度が高かったことは明白である。事実、「いいたてホーム」のように、事故後も避難せずに留まることを選択したことによって死亡率の上昇を防いだ例があるのである。

かくして、原子力災害が発生したときに、放射線被曝だけに注意を集中させ、「ともかく避難」という方針のみを採用することは、避難行動の弊害を深刻な形でもたらし、かえって**「いのちの保全」**という本来の目的を果たすどころか、逆に被害を拡大させてしまうことがある、という重大な教訓を読み取りたい。迅速かつ正確に線量を測定し、線量に応じた対策を実行すべきなのである。**「いのちの保全」**、この基本をつねに念頭に置くべきである。

講演する一ノ瀬東大名誉教授

「落語との出会い」

立川志のぽん　こと　廣瀬　敦（平成7年卒）

「袖振り合うも他生の縁　つまづく石も縁の端くれ」とはよく言ったもので、物事には出会うべきタイミングがありまして、かくいう私もご多分にもれずそんな経験がございます。それも現在商売にしております落語にまつわるお話で、その発端は在学中にさかのぼりまして・・・

「風呂先入っていい？」

『こっち気にしないでゆっくり入ってて。もう入る気力もないよ。』

落語との出会いは二年生の時の修学旅行的なイベントの夜。一日目が終わり疲れ果ててたどり着いた幕張のホテルは、まだ気が休まることない二人部屋。同室の彼を先に風呂に促し、やっとできた一人の時間。幕張の二人部屋にしては小さいテレビ。ボンヤリとつけたブラウン管には、着物姿の男が座布団に座ってしきりにカメラ目線でしゃべっている。

それが立川談志だった。

当時からお笑いに興味があったとはいえ落語に関しては全くの無知。談志の弟子である師匠志の輔に入門し、落語家になった現在では失礼極まりないことだが、当時の認識は「ビートたけしさんが言ってた落語家の怖いオジサン」。

「十七歳までに聞いた音楽に人生が影響されやすい」との話も聞くが、これがまさに天啓で、この「落語のピン」という深夜番組を、不肖の息子は英語の勉強用に買ってもらったラジカセで毎週カセットテープに録り貯め始め、今はなき白石書店で落語の本を買い始める。いい意味で人生を狂わされた忘れられない夜となった。

しかし、落語と本当に初めて出会ったのは、実を申せばドラマティックなこの夜ではなく、それ以前にも。それも在学中。それもテレビでなく生で。

一年生の時に古典芸能鑑賞会という催しがあり、歌舞伎・文楽・落語の三つの中から一つ選び、各グループに分かれての鑑賞。とりあえず比較的とっつきやすいという安直な理由で落語を選んだ。場所は半蔵門にある国立演芸場。真正面の前から三列目。残念ながら正直それしか覚えていない。熟睡。

改めて調べ直すと、その日は大名跡復活の襲名興行で、落語に興味がなくても見ておいた方がいい豪華なもので、それを思うと当時の自分の至らなさにゾッとする。

入門後、この「落語のピン」のデレクターのK氏ともご縁があり、番組の裏話もうかがうことができた。大師匠談志が他の共演者の公演内容を気に入らず出番前に帰ってしまい、代わりに師匠志の輔がトリを取って何とかおさめた日。そもそも談志が収録に来なかった日などなど。ここに書けないことも多い。

私と同じくこの番組がキッカケで落語家になった『若手』が数多くいるそうだ。だが、現役期間が長い落語界なので、若手と言っても四十代であるが。私自身も前座修業を終えて行った二ツ目昇進記念の落語会の会場は私の落語の出発点となる場所にしたいと思い、その収録場所であった深川江戸資料館を選んだ。そのことについてはK氏も大そう喜んでくれた。

だが、K氏も昨年惜しまれつつ五十代で鬼籍に入られた。晩年は番組制作だけでなく落語会もプロデュースされ、その最後となってしまった落語会に師匠志の輔と出演させて頂いたことには強くご縁を感じる。

もし国立演芸場で眠っていなかったら、自分が先に風呂に入っていたら、私の落語人生はどうなっていたのか

演る側になった現在、落語に興味のない方々にいかに興味を持ってもらうか、そして落語会の会場に足を運んでもらうか、さらにまた聴きに来てもらうか日々試行錯誤の繰り返しだが、どれだけお膳立てしても伝わらないことがあるもどかしさと、改めて出会うべきタイミングがあることを痛感し、あの日のことを度々思い出す。

この文章に袖振り合ったか、つまづいたかはわかりませんが、これをご縁に落語に触れてみてはいかがでしょうか？

総会参加者（順不同・敬称略）

S31 色川　嘉一

S29 西川恵美子

S27 坪井　洋

S20 中　山口進

茨城県行政戦略部
S55　中村　修様

進修同窓会副会長
山田　隆士様

土浦一高校長
杉田　幸雄様

S32 野口　邰司

S32 服部　彧雄

S31 山田　晴康

S31 武藤　明

S31 長島　弘道

S31 中村　信秀

S31 菊池　清

S31 大野　金一

S38 中島　穣

S37 矢口　照雄

S37 林　幸子

S37 南　隆男

S37 北川　正之

S36 若山　宏

S33 沼里　征二

S33 關井　康雄

S40 渡邉　等

S40 廣瀬　巳良

S40 伊藤　勝

S40 池和田　暁

S39 山田　忠敬

S39 鈴木　達

S39 久保内総子

S38 野村　ルナ

S41 久保田信雄

S41 川北　一郎

S41 浦野　滋夫

S41 今泉　房子

S41 今井　修二

S41 飯塚　哲哉

S41 飯塚　泰助

S41 相澤　興二

S41 安井　恵子

S41 宮本　英尚

S41 仁平　典子

S41 長戸　琴

S41 中島　徹

S41 高山　了

S41 後藤冨美夫

S41 甲田　三重

S43 柳沢　成二

S43 宮崎　好廣

S43 光永　研一

S43 幕内　邦夫

S43 常山　浄子

S43 鈴木　厚

S43 木村　繁夫

S41 山村　章

S44 平野　忠男

S44 永井　博

S44 助川　博夫

S44 逆井　誠

S44 齊藤　康雄

S44 岡崎　孝宣

S44 大関　享

S43 渡邊　愼一

S48 小坂部允功

S48 太田　慈徳

S48 井坂　公明

S46 堀越　幸雄

S46 小野　幹夫

S45 鈴木　良治

S45 設楽　健夫

S44 福田　成志

S50 穐山富美子

S48 吉田　正史

S48 本橋　浩道

S48 福島　郁夫

S48 柴原　至

S48 君山　利男

S48 神立　哲男

S48 海上　裕之

S51 一ノ瀬正樹

S50 細井　伸一

S50 樋口　久人

S50 花上　克宏

S50　高橋　克己

S50 川島　敦子

S50 加藤　祐司

S50 内田　敬子

S58 小林　直樹

S56 井川　忍

S55 藤田　和子

S55 櫻井成一朗

S53 外山　恒治

S52 海野　章

S51 三輪　崇夫

S51 武井　秀夫

H5 鈴木　徹

H5 佐藤　一成

H5 大森　敦史

H5 伊東　明彦

H5　石引　博康

H5 伊ヶ崎大理

S60 濱田　和史

S58 柳　一榮

H7 山本　厚

H7 廣瀬　敦

H7 田代　雅紀

H7 緒方　浩一

H7 青木　智典

H6 白鳥　玲子

H6 江畑　克彦

H6 五十嵐朝青

H9 遊佐　敏彦

H9 宮本　修

H9 丸田　晋子

H9 藤井麻美子

H9 福田　浩平

H9 宇都有紀子

H9 青山　大人

H9 五十嵐立青

H21 内藤　雅之

H21 鬼澤　寛樹

H19 金子　敏明

H18 根木真梨沙

H15 石井　りか

H13 山根　統

H13 七森　泰之

H11 渡辺　大輔

平成 30 年度　総会・懇親会が盛大に開催されました
平成 30 年 6 月 10 日　　学士会館にて

土浦一高応援指導部の演舞

土浦一高管弦楽部の演奏

立川志のぽんさん

一ノ瀬東大名誉教授

総会議事に熱心に耳を傾ける東進会会員

一高グッズの販売

土浦一高青春どら焼き

サプライズ演奏の根木真梨沙さんと渡邉大輔さん

初めて参加された皆様、来年も是非どうぞ

締めのエールは応援指導部ＯＢ

第13回アカンサスクラブ講演録
「気候変動と私達の未来」
伊ヶ崎 大理（平成５年卒）

私たちが高校生活を送ったのは、ちょうど日本経済の転換点にあたるときでした。入学時には絶好調だと思われていた日本経済は、バブルがはじけ、卒業時には不景気になっていました。その後、日本は失われた10年へと突入していきます。１９９０年代と失われた10年はほぼ重なりますが、環境問題を考えると、世界的に色々なことがおきたのが１９９０年代でもありました。例えば、１９９２年には、リオデジャネイロで「地球サミット」（国連環境開発会議）が開かれました。そこでは、「環境と開発に関するリオ宣言」が採択され、持続可能な開発に向け、地球規模のパートナーシップを構築することを目指すことになりました。「気候変動枠組み条約締約国会議（ＣＯＰ）」の第３回大会が京都で開かれ、「京都議定書」が採択されたのは、それから５年後の１９９７年です。

本日は、気候変動問題について簡単にお話したいと思います。気候変動はわれわれの経済や社会に大きな影響を及ぼす可能性があります。具体的には、水不足、自然災害や健康被害の増加、熱帯地域の感染症の拡大などです。絶滅する生物種の増加も指摘されています。

ＩＰＣＣ（気候変動に関する政府間パネル）が２０１３年に出した第５次報告書では、「気候システムの温暖化には疑う余地はない」こと、「人間活動が20世紀半ば以降に観測された温暖化の支配的な要因であった可能性が極めて高い」ことをはじめ、近年の温暖化の進展が報告されています。

気候変動には、これまでの公害などの環境問題と異なる点があります。第一に、現代世代が出した温室効果ガスが実際の気候変動を通じて経済や社会に大きな影響を及ぼすのはかなり先になる可能性が強いということです。このため、現代世代には、問題を先送りにするインセンティブが存するでしょう。

また、例えば１００年後の被害を現在においてどのように考えるかは難しい問題です。現在ある金額があるとします。そのお金を気候変動の抑制に使うのがいいのか、他の社会的問題の解決（あるいは問題の軽減）のために使用するのがいいのか、あるいはお金を増やし（運用や経済成長による増加などが考えられます）、将来において、問題が顕在化したときの埋め合わせに使用するのがいいのかを考える必要があります。現代世代と将来世代のバランスをどのように考えるのかは簡単ではありませんが、将来世代への配慮という視点はもたなければなりません。

第二に、気候変動に影響を及ぼすのは世界全体の温室効果ガスの排出量であるということです。したがって、世界全体での温室効果ガスの排出量をいかに効率よく減らすのかを考える必要があります。これについては国際協調の考え方が有用です。例えば、先進国の技術や資金を用いて、省エネ技術が進んでいない発展途上国と協力し、途上国の省エネ型発展を支えることは、世界全体で、より効率的に温室効果ガスを削減することにつながります。

環境をただで守ることはできません。お金、時間、労力などさまざまな「費用」がかかります。ある政策を採用するか否かを考える場合、それにかかる「費用」とその政策から生まれる便益を比較する必要があります。

最後に日本の立場について述べたいと思います。日本が排出している温室効果ガスは２０１２年時点で世界全体の４％未満であり、この割合は今後も減少することが予想されます。日本全体で25％削減しても、世界全体で見れば誤差の範囲でしょう。ただし、日本が今後世界で生きていくためには、気候変動の問題を考えていくのは重要です。今後、世界全体が低炭素社会に向かって舵を切ると、さまざまなルールや制度が変更される可能性があるからです。現在の経済やビジネスでは、ルールや制度をどのように作るのかが重要です。日本が環境技術の開発などを通じてこの問題に熱心に取り組んでいることをアピールすることによって、ルールや制度作りに関与できる立場にいることが、国全体の利益になると思います。もちろん環境技術の開発等で脱炭素型、省エネ型の社会に貢献することは世界全体のためにもなるはずです。

（平成３０年９月６日実施）

アカンサスクラブ後の懇親会にて（後列左から３番目が伊ヶ崎日本女子大教授）

次回第14回アカンサスクラブ
12月6日（木）午後6時半から
ザインエレクトロニクス会議室にて
開催予定

編集後記

今年は7月から猛暑が続き、最高気温が40度を越えた地域もありました。熱中症で救急車の出番が続出したとのこと。岡山広島豪雨災害、北海道胆振東部地震と日本列島は次々と例年にない災害に見舞われ、自然の力に人間はなす術を持たないことを思い知らされました。

その中で、全米オープンで大坂なおみ選手がセリーナ・ウィリアムスをストレートで下し、日本人初優勝。彼女の純粋でひたむきな姿勢に感激しました。

なお、進修同窓会副会長山田隆士様が去る9月4日にご逝去されました。ここに謹んでご冥福をお祈りいたします。

（星川）

リレー放談　第６回
「故郷の山と歳時記を手に」
柳　一榮(昭和58年卒)

人の縁とは本当に不思議で素敵なもの、年を重ねる事にそう感じます。久しぶりに東進会に出席し、謳粋会のお誘いを受けお隣同士になったのが、前回リレー放談を書かれた藤井さんでした。中学もお隣。（といっても山ひとつ越えますが。）話題が豊富で、実に楽しいひとときでした。『東進会』ももちろんそうですが、『同窓』とはその根幹の部分が繋がっていて何と安心できる場でしょうか。

中でも人生において最も多感な時期を過ごした『一高』でのつながりは、改めて貴重なものだと思いました。自分の子よりも若い後輩達の真摯な演奏に合わせての諸先輩、皆様方との校歌斉唱には胸が熱くなりました。

『沃野一望数百里……そそり立ちたり筑波山　空の碧をさながらに……筑波の山のいや高く』あの頃がよみがえりました。

私は、筑波山麓を望む豊かな田園地帯にある小さな村(現土浦市旧新治村)に生まれました。いつも山の懐に抱かれていたので校歌のこの部分がとくに好きです。そういえば山の形もそれぞれ。新婚時代を過ごした湘南の窓からは、それはそれは大きく富士山が見えましたが、見慣れた風景と違いなぜか少しさみしく感じられたものでした。故郷を離れて三十年近くになりますが、今でも実家に帰る度に『筑波の山』がくっきりと目にとび込んでくると、「あー帰ってきた。」となんとも言えない郷愁が湧いてくるのは、皆様も同じではないでしょうか。『紫峰の山』の美しさは時を越えても感嘆の一言に尽きます。

さて、しばらく前より、五十の手習いで『俳句』を始めました。目に映る風景、感じる風、色が違って見えてきたのには自分でも驚いています。まわりの景色、日々の暮らしの一コマを心のシャッターに収め、五七五に起こす作業は、まだまだ日が浅く勉強することばかりで今は、『歳時記』の季語の世界に魅了されています。俳句では季語を、春・夏・秋・冬・新年の五つの季節に分類します。さらに細かくいえば同じ春でも季節の進行にともなって、新春・仲春・晩春・三春の四つに分かれています。季節の移ろいを敏感に感じ、その時折々ふさわしい季語を詠むのが俳人のいのちともいえる作業です。

例えば「山」の季語についてみてみると、春の「山笑う」は芽吹きの山々のもこもこした様子をよく表していますし、これに対し冬の「山眠る」とはよくいったもの、擬人化された静かな山の表現に感動します。夏は「山滴(したた)る」で、新緑が滴るように瑞々しい姿をいい、秋は「山装(よそお)う」紅葉した山の姿を、錦繍をまとってめかしこんだ人に見立てています。いずれも中国の北宋の水墨画家、郭熙(かくき)の『山水訓』が元となり、現在の俳句の季語に至ります。「春山淡冶(たんや)にして笑うが如く、夏山蒼翠にして滴るが如く、秋山明浄にして粧ふが如く、冬山惨淡として睡るが如し」とあります。季語の歴史は古来から培われたもので本当に奥が深いと感じています。

「山粧ふけものの道もくれなゐに　檜　紀代」

秋の季語で好きなものに『星月夜』があります。月のない夜空に満点の星がきらめき、まるで月夜のように明るい夜のことです。月明かりの美しさはまた格別です。

「星月夜空の高さや大きさや　江左　尚白」

思わず、夜空を見上げたくなりませんか。

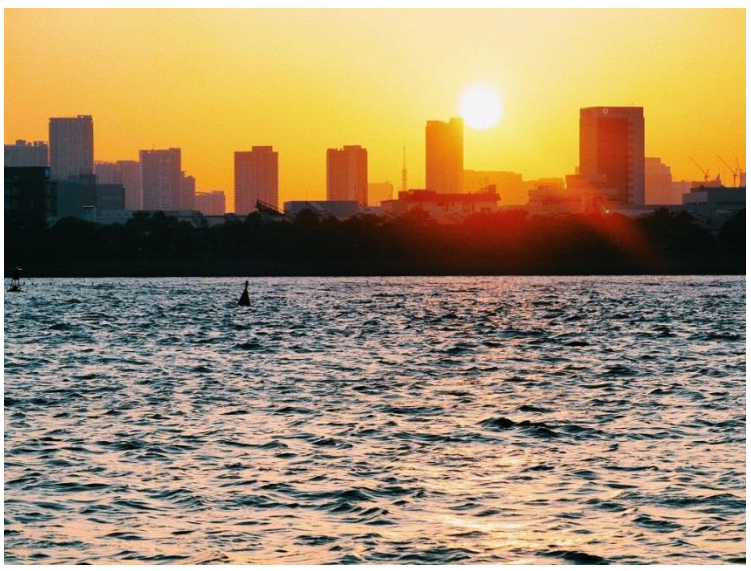
「つきぬけて天上の紺曼珠沙華　山口　誓子」

これも突き抜けるような秋の空の青さと、凛とした曼珠沙華の花茎の姿、まっ赤な花とのコントラストが美しく好きな句の一つです。

ところで私は、俳人黛まどかさんの結社『ヘップバーン』の流れを汲む『シーズンズ』に属しています。黛まどかさんの句です。

蝶生れて空の青さを疑はず
夕焼の端っこにゐて君想う
ひとつ灯に父母のゐる稲の花

どれも瑞々しい感性と優しさに溢れています。



仲間の皆様との月一回の句会をはじめ、ネット投句や、この秋には湯河原吟行や、羽黒山での全国俳句大会へも参加する予定です。

一高の恩師、戸部守先生もご自身の高校時代から六十年以上俳句の世界に親しまれておられます。頂く年賀状には生き生きとした句が書かれており、毎年心待ちにしております。

これからも歳時記を手に、四季の移ろいを肌で感じ故郷の景色、父母の笑顔を思い浮かべながら、瞬間瞬間を五七五に込め過ごしていきたいと思っています。

「一輪の花持つ少女巴里祭(パリー祭)　一榮」

次回は、大学で教鞭をとられ、東進会でもいろいろとお世話下さっている、櫻井成一朗さん(昭和５５年卒)にお願い致したいと思います。どんなお話を伺えるのか楽しみです。